

ワクチンの使用状況アンケート調査報告

藤 田 世 秀（日本 SPF 豚協会）

All about SWINE 52, 23-25

近年、AD（オーエスキー）、PCV2（サーコ）、PED（豚流行性下痢）等様々な感染症で、生産者は甚大な損害を被っています。そこに登場しているのが様々なワクチンです。

認定農場出荷肉豚1頭あたりのワクチン代は一貫生産農場で、認定申請に農場成績の提出を義務づけた2004年度は324円、10年前（2006年度）は407円、5年前（2011年度）は671円、一昨年（2015年度）が806円と上昇を続けてきました。2016年度は783円で、一服の感があります。しかし、高止まりには変わりありません。その原因としては、高額なワクチンが増えたこと、そして、1頭の豚に何種類ものワクチンを接種していることにあるようです。また、従来のワクチンに比べると、その効果に違和感を持つ人もおられ、その評価はまちまちの感があります。そこで、実際にワクチンを使用している生産者の方々に、使用しているワクチンの手ごたえをアンケート調査しました。対象は一貫生産農場と繁殖専門農場140の認定農場です。2017年9月に実施しました。回答をしていただいた農場数は71農場（回答率50.7%）でした。回答農場の地域別内訳を表1に示します。

回答率が約半分なので、全体傾向として捉えるには無理があると思います。こういう見解の生産者の方もおられるとあっていただければ幸いです。

アンケートは対象疾病ごとに、使用ワクチン商品名を記載してもらい、その効果判定と使い始めのきっかけを選択してもらいました。対象疾病はPCV2、MPS（マイコ）、AD、APP（アクチノバチルス）、AR（萎縮性鼻炎）、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）、豚丹毒、日本脳炎、パルボ、豚大腸菌症、PED、TGE（豚伝染性胃腸炎）、その他としました。

ワクチンを使い始めた理由としては、獣医・コンサルの勧めが47%で一番多く、次いで販売店・メーカーの勧めで12%でした。

地域別1農場平均使用ワクチン数を表2に示しました。

地域別1農場平均使用ワクチン数は、北海道が3種類で一番少なく、九州が7.6種類が一番多く、

表1：回答農場の地域別内訳

地域	回答農場数
北海道	7
東北	24
関東	9
北信越・東海	5
中国	3
四国	6
九州	16
記入無し	1
合計	71

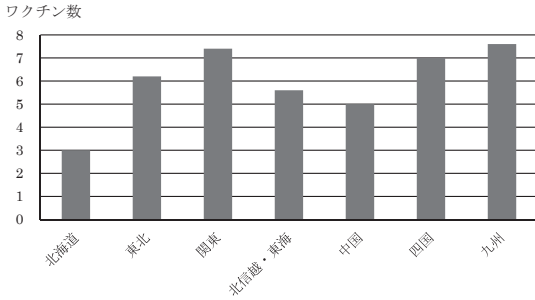


表-2: 地域別1農場平均使用ワクチン数

次いで関東（千葉・茨城）が7.4種類でした。疾病汚染度合い、豚の飼養密度の高い地域の使用ワクチン数が多いようです。使用ワクチン数の一番多い農場は千葉、富山、鹿児島にあり11種類でした、一番少ない農場は北海道地区にあり1種類でした。

対策疾病別地域別ワクチン実施割合を表-3に示しました。この表で死流産対策は、日本脳炎、パルボ、下痢対策は、豚大腸菌症、PED、TGEを言っています。したがって、日本脳炎とパルボワクチンを両方接種している農場は死流産対策

200%となります。また豚大腸菌症、PED、TGEをすべて接種していれば下痢対策は300%になります。

ここで、特徴的なのは、サーコ対策はどの地区も実施率が高いことです。また、豚丹毒対策、死流産対策は北海道を例外として、実施率が高かったです。マイコ対策、AR対策は西日本ほど実施率が高いようです。意外だったのは、APP対策、PRRS対策、下痢対策の実施率が低かったことです。

対策疾病別ワクチン効果判定を表-4に示しました。

対策疾病別で、効果ありと判定されたワクチンで、50%を超えたのは、AD対策ワクチン、サーコ対策ワクチンでした。その効果のほどが判らないと答えたワクチンで、50%近かったのはPRRSワクチンでした。次いで、グレーサー対策ワクチン、下痢対策ワクチンが約30%でした。また、効果があると思うと答えた対策疾病ワクチンは、死流産対策ワクチンとマイコ対策ワクチンで、

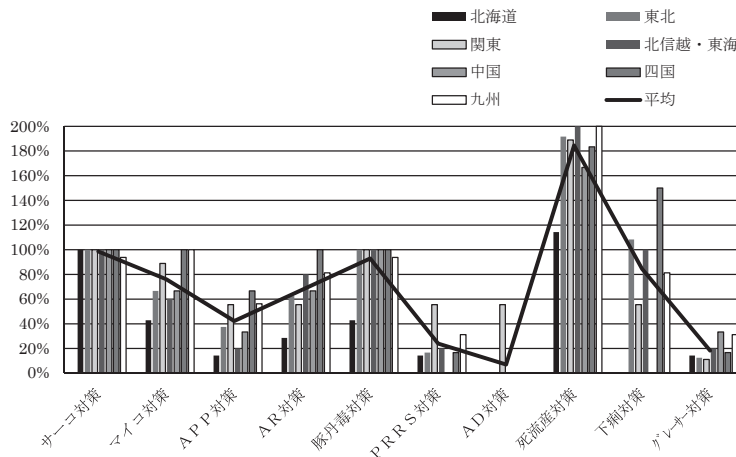
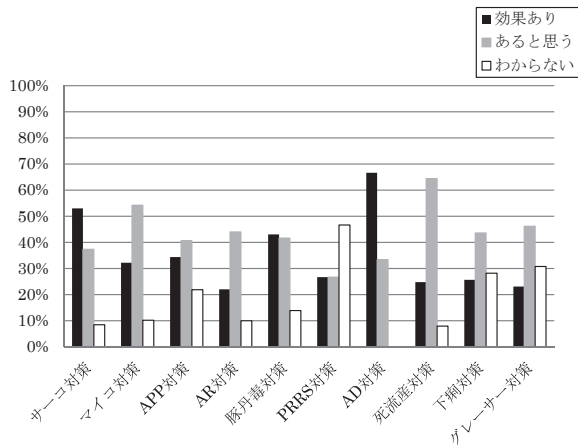


表-3: 対策疾病別地域別ワクチン実施割合



表－ 4：疾病対策別ワクチン効果判定

50%を超えていました。

どのワクチンも効果があるとして使用している
 ようです。しかし、効果が上がっているというこ

とを判定する視点は、このアンケートではわかり
 ませんでした。